



2025.10.2 第12号

森田 博

5年「花から実へ」

受粉実験の考察

受粉をさせためばなに実ができた。

5年生の「花から実へ」の学習では、9月9日（火）や9月17日（水）に受粉させためばなや、受粉させなかっためばなを1週間後に観察しました。確実に子どもたちの手で花粉をめしべの先につけたものが結果として実になり、大きく成長していました。中には、袋を破りパンパンに大きくなった実もありました。こちらは、めしべの先にすでに花粉が付いてしまっていたものだと思います。かなり大きな実になっていました。



花粉をつけ実になったもの



袋をかぶせたままにしたもの



←こちらはビッグサイズ。初めはプールサイド側にあっためばなのつぼみでしたが、実が大きくなった重みで、フェンスの外側へ垂れ下がっていました。袋がはちきれんばかりに、ヘチマの先にへばりついていました。

<児童ノートの考察記述>

- 花粉は、育つために使っている栄養みたいなものかなと思った。
- 受粉は大切で、必要だと思った。受粉しないと実は枯れてしまう。
- 私は、花粉は実をつくり大きくさせる元だと思った。受粉させた方は、ぐんぐん大きくなって、実を作っていたけれど、受粉させなかった方は、実ができず、枯れてしまった。だから、花粉を必要としている果物も、成長させるために鳥やハチに花粉を付けてもらい、きれいで大きな実ができると思った。
- なぜヘチマはめばなとおばなにわかれているかというと、1つだけの花だと、花粉が全て運ばれると枯れてしまうからだと思った。⇒めばなは実を、おばなは花粉を、それぞれで役割を果たし、確実に、より大きな実を、そしてたくさんの種子をつくることができるようにしている。（補足）
- おばなの役割は、花粉がついていないめばなに花粉を飛ばすこと。